参考文献

Roff, William R. 1994. *The Origins of Malay Nationalism*. 2nd ed. Kuala Lumpur: Oxford University Press. (first published by Yale University Press, New Haven and London, 1967.)

多和田裕司. 2005.『マレー・イスラームの人類学』京都：ナカニシヤ出版.

徐如林.『連峰縦走――楊南郡的傳奇一生』晨星出版，2017，269p.

本書（中国語での執筆）は台湾原住民族の研究において大きな功績を残した楊南郡氏の波乱に満ちた人生を，楊氏の他界直後に楊氏の妻，徐如林氏が記したものである。本書は著者による前書きから始まり，楊氏の人生を描いた本編の後には，著者による後書きが添えられる。さらに付録には，楊氏の他界後に新聞や雑誌に寄稿された追悼記事3篇のほか楊氏の年表並びに著作表が付されている。また楊氏の人生のそれぞれの場面を象徴する写真も多く挿入されている。

楊氏の人柄や研究については『幻の人類学者森丑之助――台湾原住民の研究に捧げた生涯』［楊 2005］に寄せられた宮岡真央子氏による叙述「時代を隔てた二人の学術探検家――森丑之助と楊南郡」がある。ここでは学術機関に属さず独自に台湾原住民族の村々を渡り歩き奔放かつ純朴な目線で当時の台湾原住民族をありのままに記録し，その作品の価値が新たに見いだされ始めた森丑之助という人物と，楊氏との類似点を描き出している。

楊氏の人生を物語る本書の特徴は楊氏を最も知る人物，40年以上にわたり楊氏に寄り添った妻――楊氏の登山パートナーでもあり楊氏の山岳道とその歴史に関する著作の共同執筆者でもある――徐如林氏の手によるものであるという点にある。楊氏の最良のパートナーであった徐氏にしか記述できない詳細さで楊氏を浮き彫りにしている。楊氏の著作は生前，登山愛好家，台湾文化史愛好家に親しまれ，多くのファンが慕っていたということであるが，本書は生前の楊氏を知らない読者にとっては楊氏への最良の入門書だろう。特に台湾原住民族の言語・文化史などを研究する者にとって興味深い一書になるはずである。この分野の研究に就くにあたり，楊氏の著作を見逃すことはできない。

楊氏の生い立ちから始まり晩年にいたるまでの一生はまさに起伏に富んでおり，楊氏の人生を通して，日本統治時代，国民党時代，そして現在にいたるまで常に変化にさらされてきた台湾の近代史が垣間見える。徐氏の描く楊氏の生きざまをここでは簡潔に紹介する。

楊氏は日本統治時代の1931年，台南においてシラヤ族の集落に生を受ける。17世紀，台湾西南部がオランダに統治された時代（1624–61）においてシラヤ族は台南一帯の平地に暮らしていた種族であるが，時代が鄭成功統治（1661–83），清朝統治（1684–1895）と移るにつれ漢民族移民の圧迫を受け，土地の痩せた山地へと退き，固有の言語（シラヤ語）も徐々に失っていった。楊氏の祖父の時代も移住地を求めて転々としていたということである。楊氏の家系はシラヤ族の中でも，オランダ時代とそれに続く鄭成功時代を通じて最も開花した集落であった新港社［林田 2010: 65］の末裔である。シラヤ語は日本統治時代に入るとほぼ消滅した言語となっていた［Tsuchida and Yamada 1991］。しかし本書に興味深い記述がある。楊氏の幼少期，楊氏の父のもとには，シラヤ族集落の各地から知人が訪問しに来ていたとのことであり，楊氏はそれらの人々が知らない言語を話すことを訝しく思い，母に問い詰めたということである。このころシラヤ族が日常的に用いる言語は閩南語に変わっていた。もちろん楊氏の第一言語も閩南語であったはずで，楊氏が耳にした知らない言語とは，年配者のみの間でわずかに記憶され，同族同士が集まる限られた場面で使われるのみになったシラヤ語である。また，この日本時代の台湾に生まれ初等教育を受けた楊氏はもちろん日本語にも堪能である。13歳で少年労働者として日本に渡りゼロ戦を造る工場で終戦まで1年余り働いた。台湾に戻ってからは就学しなおしたが，これまで用いていた日本語は不要になり，新たに中国語を取得しなければならなくなった。高校時代には勉学に一念発起し台湾大学外国文学部に合格する。そのため楊

氏は英語にも堪能である。楊氏の言語背景――先祖の言語としての失われたシラヤ語，母語の閩南語，教育言語の日本語，その後の教育言語である中国語，第二言語の英語――にも近代台湾の歴史が垣間見える。

大学卒業後は兵役，映画製作会社，高校英語教師などを経て，最終的にアメリカ空軍基地の調査員になる。その後アメリカ大使館領事局に異動し，中華民国（台湾）が国連を脱退しアメリカと正式な国交が途絶えた後は，名称を在台アメリカ協会と変えた同機関で50代後半まで勤めあげた。ここから研究者としての第二の人生が始まるのだが，その前に楊氏の登山家としての一面を述べなければならない。

楊氏は30代半ばにして初めて本格的な登山を体験する。第1回目の登山は登頂に至らなかったが，山に魅了された楊氏は数年足らずで登山家として知られるようになる。そして登山を始めて10年足らずで台湾百名山の登頂に成功する。楊氏の登山の目的は自然を愛でることだけではなかった。山岳路に点在する台湾原住民族の村々やそこに暮らす人々，彼らにまつわる歴史などに目を向けていた。楊氏は登山をしながらフィールドワークを行っていたことになる。研究熱心な楊氏の登山人生の中で最も精彩を放つ出来事はおそらく，清朝時代に拓かれながら後代には忘れ去られてしまった山岳路，八関通古道（台湾中央山脈の横断路）の再発見だろう。はじめは参考資料のあまりの少なさに調査を渋っていたそうだが，故宮博物館に通い開館から閉館まで閲覧室を出ることなく清朝時代の資料の渉猟に明け暮れ，付近の原住民から聞き取り調査を行うなどして小さな手がかりを少しずつ蓄積し，遂には古道の全容を明らかにすることに成功した。楊氏は長年に亘って山岳地帯の研究に携わってきたが，その調査成果が次々に出版されるようになったのは楊氏が60歳を過ぎてからである。

次に楊氏の出版作品について簡潔に述べる。ジャンルは二つに分けられ，ひとつ目は日本語から中国語への翻訳本である。日本統治時代における研究を中国語に翻訳するだけでなく，詳細な注釈をつけた。例えば［鳥居 1996; 伊能 1996a; 1996b; 鹿野 1998; 森 2000; 馬淵 2014］などが挙げられる。日本統治時代の台湾原住民研究において代表とされる人物，伊能嘉矩，鳥居龍蔵，森丑之助，鹿野忠雄，馬淵東一の研究は100年以上前に記録されたものであり，変化の大きな台湾においては，地名，集落名，部族名が変わっていることが多い。別の場所に移住することもあれば廃村になっていることもある。そのためこれら日本時代の記録は，台湾の地理と日本統治時代後の台湾の歴史に造詣が深く，二者を対照できる人物でなければ容易に理解できない。この難度の高さのためほとんど顧みられてこなかった。これら先人の研究を多くの人が利用できるように著わしたのが楊氏であり，これら翻訳本の醍醐味は注釈にあるといっても過言ではない。これら注釈にこそ，楊氏のフィールドワークの成果が表れており，日本統治時代の台湾を経験していない評者にとって日本語の原書を読むよりも楊氏の翻訳本を読むほうがはるかに内容を咀嚼することができる。出版作品のもうひとつのジャンルは登山道の文化史に関する著作でありほぼすべて本書著者の徐氏との共同での執筆である。その中から代表的なものを挙げると，『最後的拉比勇（評者訳：最後のラビヨン）』［徐・楊 2007］，『合歓越嶺道』［徐・楊 2016］，『能高越嶺道』［徐・楊 2011］などである。これらはそれぞれ，日本統治時代に台湾原住民族によって引き起こされた抗日蜂起のうち，三大事件と呼ばれる大分事件，太魯閣戦争，霧社事件にかかわる山岳路の文化史的描述である。楊氏には他にも多数の著作があるが，その中での最高峰は移川子之蔵ほか台北帝国大学（現台湾大学）の土俗人種学研究チームが著わした『臺灣高砂族系統所屬の研究』［移川ほか 1935］の翻訳・注釈本だろう。日本統治時代において，台湾原住民族の人類学的研究の集大成ともいえるこの書を正確に翻訳し最適な注釈を加えられるのは楊氏をおいてほかにいない。ただ，この原書と同年に出版され，台湾原住民諸語（通称台湾オーストロネシア諸語）研究の最高峰と目される書がある。小川尚義ほか台北帝国大学の言語学チームが著わした『原語による台湾高砂族傳説集』［小川・浅井 1935］であるが，未だ翻訳・注釈が試みられていない。この作業は後代の台湾オー

ストロネシア諸語研究者の課題として残されている。

本書を読み進めるうちに，楊氏の作品を読んでみたいという思いに駆られる。また，楊氏のように実際に自らの足で各地を踏査しなければ台湾原住民族を深く理解することはできないのではないかという焦りにも駆られる。楊氏の人生を通して，台湾文化史に触れるために是非手に取ってもらいたい一書である。

最後に，楊氏の登山協力者として荷物の運搬を担った台湾原住民族に対する見解が記されている箇所を引用して締めくくりたい。「第一に，山地原住民の体力は平地に暮らす者の全く及ぶところではない。第二に，登山道として開かれていない急峻な山を登る場合，安全確保と登頂成功のために最も確実なのが原住民の協力を得ることである。第三に，原住民の人格と彼らの信仰を尊重しなければならない。彼らを友人と見なし，雇用人と見なしてはならない」（評者訳，本書 p. 104）。特に第三点には，フィールドワーカーとしてのあるべき態度が示されている。

（落合いずみ・神戸市外国語大学／國立清華大學）

参考文献

林田芳雄．2010.『蘭領台湾史――オランダ治下38年の実情』東京：汲古書院.

伊能嘉矩．1996a.『平埔族調査旅行』楊南郡（訳注）．台北：遠流.

――――．1996b.『臺灣踏査日記』楊南郡（訳注）．台北：遠流.

徐如林；楊南郡．2007.『最後的拉比勇』水里：玉山国家公園.

――――．2011.『能高越嶺道――穿越時空之旅』台北：農委會林務局.

――――．2016.『合歡越嶺道――太魯閣戰争與天險之路』台北：農委會林務局.

鹿野忠雄．1998.『鹿野忠雄――縦横台湾山林的博物學』楊南郡（訳注）．台北：遠流.

馬淵東一．2014.『臺灣原住民族移動與分布』楊南郡（訳注）．台北：遠流.

森　丑之助．2000.『生蕃行脚』楊南郡（訳注）．台北：遠流.

小川尚義；浅井恵倫．1935.『原語による台湾高砂族傳説集』台北：台北帝国大学言語学研究室.

鳥居龍蔵．1996.『探險臺灣』楊南郡（訳注）．台北：遠流.

Tsuchida, Shigeru; and Yamada, Yukihiro. 1991. Ogawa's Siraya/Makatao/Taivoan Comparative Vocabulary. In *Linguistic Materials of the Formosan Sinicized Populations I: Siraya and Basai*, edited by Sigeru Tsuchida, Yukihiro Yamada, and Tsunekazu Moriguchi, pp. 1–94. Tokyo: The University of Tokyo, Department of Linguistics.

移川子之蔵；馬淵東一；宮本延人．1935.『臺灣高砂族系統所屬の研究』台北：台北帝国大学土俗人種学教室.

楊南郡．2005.『幻の人類学者森丑之助――台湾原住民の研究に捧げた生涯』東京：風響社.